

2022.1.23

ご報告：1/22 第 29 回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

オミクロン株の猛威が吹き荒れるなか、2022 年の幕開けとなる（オンライン月例会）1/22 第 29 回働学研が開催されました。

そうした中、ご参加いただきました下記 26 名に、お礼申し上げます。

（敬称略：井本、太田、小野、片山、金井、聴涛、木林、熊坂、小林、櫻井、佐藤、澤、高松、田中、槌田、程、中野、中谷、波多野、濱、平松、藤岡、堀、安嶋、横田、十名）

第 29 回働学研は、2 部編成で 5 本の研究発表がなされました。

第 1 部は濱さん、第 2 部は太田さんに司会をしていただきました。

第 1 部 生産力&環境問題&出版への視座

第 2 部 勤勉・勤労思想と働学研のロマン

新年早々、熱のこもった発表、そして活発な議論が展開されました。

途中、第 2 部に入った段階で、発表者堀さんのパソコンにトラブル発生。急ぎよ順番を入れ替え、平松さんの発表から入りました。オンラインでは、そうしたトラブルはつきものである、いかに迅速に対応するかが問われます。本研究会でも、澤さんを中心に、備えています。

司会の妙と各位のご協力もあって、配分（35 分/本）に沿って進めることができましたこと、感謝申し上げます。

1/22 第 29 回働学研プログラム

（司会：太田・濱・十名、画面：澤 & 発表・議論各 15～20 分：計 35 分/本）

第 1 部 生産力&環境問題&出版への視座（司会：濱 14:00～15:30）

小野 満：「生産力の質的発展の重要性」

程 遠紅：「中国における都市生活ごみ問題への歴史的視座（博論 第 1 章）」

高松平蔵：「出版を進めるエンジンは何か —ジャーナリストの視座とノウハウ」

第 2 部 勤勉・勤労思想と働学研のロマン（司会：太田 15:30～17:00）

平松民平：「もう一つの働学研（父・平松利平を語る）」

—社会主義者・経営者・技術者としてのロマン—

堀 隆一：「石田梅岩にみる日本の勤勉・勤労思想」

小野さんの発表は、生産力の量的発展と質的発展の関係、ICT と機械との関係、消費主義と POS、労働の役割を問い直したものです。それをめぐり、次のような議論がありました。生産力の発展とは何か、量的と質的に分けて捉えることが妥当か。消費者の要求に合わせ

ることは、過剰消費の解決につながるのか。発表の前半と後半のつながりを明示すべし。

程さんの発表は、中国のごみ問題について、数千年にわたる歴史の変遷を俯瞰し、現代の大量生産・大量消費・大量廃棄のあり方を問い直し、農・工・サービス業の循環システム視点から捉え直したものです。質疑応答で、「近代以前の中国に環境問題はなかった」発言は論文趣旨にも反し残念。博論全体での位置づけ、廃棄物循環利用の現事例等の助言も。

高松さんの発表は、数冊の出版体験をふまえジャーナリストの視点から出版ノウハウについて、戸坂潤「ジャーナリズムとアカデミズム」、世阿弥「離見の剣」、ハーバーマス「公共圏」等をふまえ、提示されたものです。古典から何を学び、現代的にどう理解するか。読者層をどう想定するか、読者とは何か。彼らに届く問いや文体、作品とは何か等の議論。

平松さんの発表は、御父上（平松利平博士）の評伝で、社会主義者、経営者、技術者としての生き方、働き様に光をあてたものです。「人民に対する正しい姿勢」、奉仕の精神、「主体的に生きる」ロマン。「先人への 50%の敬意と 50%の否定」論は父ゆずり。働・学・研＝三角形の面白さ、その真ん中＝「遊」。深く広く論。息子が父を語る素晴らしさ＝希少性。

堀さんの発表は、石田梅岩の勤勉・勤労思想について、山本七平などの先行研究をふまえて、日本の古代から現代にまたがる視点から考察したものです。百年前の鈴木正三の労働＝仏道、生き甲斐＝成仏論を継承。勤勉と儉約の両立、「より丁寧に」の生産者本位思想。速水融「勤勉革命」、勤勉の衰退と日本の低迷との関係、現代の勤勉とは何かなど議論。

5本の発表には、それぞれドラマも含まれていて議論も含め、実に興味深く味わい深いものがありました。新年早々を飾るにふさわしい月例会となりました。終了後、半日も経たずに、下記5本のコメントが寄せられています。

議論を触媒に、各位の研究と交流がさらに発展することを祈っています。

<参加者からのコメント>

C1 濱 真理

「本日も、経験に裏打ちされた発表が多く、聴き応えがありました。」

C2 中谷武雄

「今日のご苦労様でした。少し毛色の違う報告もあり、興味深いでした。」

C3 高松平蔵

「本日はどうもありがとうございました。久々に参加し、良い刺激になりました。」

とりわけ小野さんと、程さんの発表を続けて拝聴できたことがよかったです。そこから「消費者の登場と展開」というテーマを見出しました。

ご承知のように工業化で、史上初めて「労働者」という階層が生まれました。労働運動は「人間の尊厳」の確立に大きく影響したと理解していますが、同時に近代社会における余暇の追求の始まりであり、現在につながる「消費者」の登場でもあると思います。

工業化と密接な資本主義についてはマルクスをはじめ、クリティックが早くから出ておりましたが、消費者に対するクリティカルな議論は 20 世紀再後半。「エシカル消費」など、生産と関連づけた構造的視野から、倫理的な議論が出てきたのは 21 世紀からです。

さらに堀さんの発表と無理やり関連づけるならば、＜労働者であって消費者でもある人間＞の在り方の変遷を考えると、一つのキーワードが「勤勉・儉約」なのでしょう。

労働の規律としての勤勉、余暇の対立項としての勤勉。これらの関連性の変遷を確認していきたいと思いました。

平松さんの発表も「世代論」として、考えてみたいことなど、いくつか論点がありました。

雑駁な感想で恐縮です。取り急ぎお礼かたがた。」

C4 波多野 進

「今日はすばらしいご発表をいくつも伺うことができ、幸せでした。

高松さん、平松さんのお話しは、他では接することができない類のもので、「働学研」のおおきなメリットと思います。

・小野さんのご研究については、消費主義、過剰生産にどう対処するのかを問う以前に、なぜそういう事態に陥ってしまうのかの言及がほしいと思いました。

・程さんのご研究については、少しコメントさせてもいただきましたが、次のようなことを考えていました。彼女のオリエンテーションにフィットするかどうかはわかりませんが、あらためてお伝えいただければ幸いです。

程報告は小野報告と表裏のもので、大量生産・大量消費が大量廃棄に結果する。生産・消費・廃棄のすべての過程で環境破壊が進行する。報告のはじめに、前近代では環境問題はなかったという趣旨の発言があったように思うが、それは歴史的事実に反しており、幾つかの文明で都市が環境問題の悪化から崩壊し、衰退し、放棄されたことがわかっている（たとえばシュメール文明、マヤ文明、イースター文明、インダス文明）。

人間は有史以来、生産活動によって環境破壊を繰り返してきたと言っても過言ではない。なぜそうなってしまうのか、その結果、今どういう段階に立ち至っているのか、それはどのようにして乗り越えることができるのか。そういう文明論的問いが、報告には欠けている。工学の論文ならそれでもよいかもしれないが、歴史科学の論文なら、人間＝自然の物質代謝過程（マルクスの表現を用いれば）についての歴史的認識を背景に持たないと、「今後」の考察が深みに欠けたありきたりのものになってしまうのではないか。

・堀さんのご研究については、速水融氏以来の「勤勉革命」論のさらなる展開を期待します。」

C5 平松民平

「昨日の働学研、ありがとうございます。興味深い論点も浮かんできました。いずれよく考えてみたいと思います。

別件ですが、高松さんの報告について質問があるのですが、彼に直接メールしていいものか、ちょっと迷うので、とりあず、十名さんに質問、意見を送ります。

* 出版の動機、意義など、出版のエンジンについてのお話と思います。

* 一方、最近では電子的出版、物質的な版をもたない出版が可能になっています。

* その場合、エンジン出力が小さくても出版、出帆できると思います。

* 低出力での出版でなく出帆では動機や意義などがどのような影響を受けるのか、受け

ないのか、連続面と不連続面などについて、ご意見を聞かせていただければ有難いと思います。」

<2月、3月の働学研>

なお、2月以降についても、ご発表を受け付けています。十名（tona@iris.eonet.ne.jp）までお知らせください。お待ちしております。